週刊 武四郎

第48号
2019年（平成31年）3月6日（水）
発行・松阪市

監修・松浦武四郎記念館

●毎月第一週は、
松浦武四郎の人となりについてご紹介します

終活の達人

武四郎さんが亡くなったのは七十一歳の時でした。現代の七十代はまだまだ若々しい方が多いですが、明治の頃の七十といえば今の八十歳くらいのイメージです。

武四郎さんは老いを感じはじめた六十代後半から、今でいう終活に邁進しはじめます。

まず、お墓の問題。富岡鉄斎という有名な京の文人に勧められて、伊勢と奈良と紀州の境にある大台ヶ原という秘境（標高一六九五m）に三度も上り、「ここに墓を建てる」と言い出して周囲の人々を驚かせました。終活といっても、どこまでもアグレッシブです。有言実行で本当にこの秘境の山奥に立派な墓を建てたのですが、実際には武四郎さんの遺骨は東京の染井霊園に埋葬されたので、歯が一本埋めてあるだけだそうです。残された家族はさぞ困惑したことでしょう。

生前遺影（？）は、チョンマゲを切った記念にすでに撮ってありました。

何ごとにも抜かりなく準備万端整えるのが信条の松浦老人は、当然のことながら立派な遺言状も作りました。現在、現物は行方不明ですが、没後、様々なコレクションと共に徳川家の南葵文庫に納められたという記録が残っていますから、凝り性の武四郎さんのこと、さぞかし力作ではなかったかと思います。なんとこの遺言状には『千亀万鶴』という、いかにもめでたいタイトルまでついていました。

七十歳になった記念に、武四郎さんは富士山にも登りました。お供は武四郎さんの専属俥引きだった松平さんです。

何度も繰り返しますが当時の七十歳といえば普通はヨボヨボの老人です。それなのに松浦老人は元気いっぱい。富士登山を終えて戻った旅籠で誰何され、「富士山に登ってきた」と曼鑠と答えたら誰も本気にしてくれなかった、といいます。

その翌年、友人宅を訪ねた時に脳卒中で倒れ、その数日後に帰らぬ人となりました。ある種、〈見事な一生〉といえそうです。

松浦武四郎（1818～1888）
三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地（今の北海道）を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として〈北海道〉のもととなる〈北加伊道〉を含む6案を政府に提案したことから〈北海道の名付け親〉と称される。

文・河治和香　装画・りんたろう　編集・細山田正人　デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』（河治和香著）が、小学館より好評発売中！